

「返魂香」考

—「李夫人」との関係をめぐって—

A Study on the “Fan hun xiang”: About with “Li fu ren”

張 小 鋼

Zhang Xiaogang

はじめに

「返魂香」と「李夫人」は共に浮世絵における中国画題であるが、実際には「李夫人」は中国では肖像画がほとんど見られず、「返魂香」と同じような構図となっている。つまり、返魂香の煙の中から李夫人の姿が立ち昇るといふ構図である。考えてみれば、李夫人



図版1:「李夫人」(清・顔鑑塘撰, 王翹繪『百美新詠』圖傳一)

しかしながら、中国ではそもそも李夫人と返魂香とは無関係である。その李夫人がいつ、どのように返魂香と結びつけられ、この画題が形成されたのであろうか。本文ではこの問題に一つの考察を加えたいと思う。

一、史料に見る李夫人の記述

李夫人についての記述は、もっとも早いのが司馬遷(前145～前86)の『史記』卷四十九「外戚世家第十九」に見える。

王夫人蚤卒。而中山李夫人有寵。有男一人，爲昌邑王。李夫人蚤卒，其兄李延年以音幸，號協律。協律者故倡也。兄弟皆坐姦族。是時其長兄廣利爲貳師將軍。伐大宛，不及誅。還而上既夷李氏。後憐其家，乃封爲海西侯。(王夫人が早く亡くなると、中山の李夫人が寵を受けた。男子一人を生み、その子は昌邑王となった。李夫人は早く亡くなったが、彼女の兄の李延年は音楽によって寵愛され、協律[都尉]の称号を与えられた。協律[都尉の李延年]はもと芸人だった。その兄弟は皆悪事を犯したかどで一族皆殺しの刑にあった。その時、彼の長兄の李広利は貳師將軍として大宛を討伐しており、処刑を受けないですんだ。帰国したときには、お上はすでに李氏を皆殺しにした後だった。その後彼らの家[の不幸]を憐れみ、海西侯に封じた。)

とある⁽¹⁾。この百字足らずの記述で李夫人や彼女一族の運命を記録している。後に後漢の班固(32～92)は『漢書』に詳細に李

夫人とその一族のことを記している。簡単に要約すると、①李夫人の兄李延年在「北方有佳人」という歌を歌い、漢武帝（前141～87在位）がはじめて彼女のことを知り、加えて平陽公主の推薦で李夫人を寵愛するようになった。李夫人が武帝のために一人の男の子（後の昌邑王）を生み、早く亡くなった。②李夫人は「傾城傾国」の美貌で、踊りも得意であった。そのうえで、大変聡明な女性でもある。彼女が病床に臥した際、武帝が見舞いに行った。しかし彼女が布団で顔を隠し武帝に見せようとしなかった。彼女は自分が卑しい身分で武帝の寵愛を受ける理由が美貌であることをよく知っている。そのため、美貌が衰えると、愛情も薄れる。愛情が薄れると、子供や兄弟を世話する気持ちもなくなると思い、最後まで武帝に顔を見せなかった。③李夫人が亡くなった後、武帝が李夫人に対する思いがますます強くなり、李夫人の遺影を描かせて甘泉宮に飾った。そしてさらに方士を招いて李夫人の霊を呼び出すことにした。そのことを班固が『漢書』（卷九十七上，外戚傳第六十七上）に次のように記している⁽²⁾。

上思念李夫人不已，方士齊人少翁言能致其神，乃夜張燈燭，設帳帷，陳酒肉，而令上居他帳，遙望見好女如李夫人之貌，還幄坐而步。又不得就視，上愈益相思悲感，爲作詩曰：「是邪，非邪？立而望之，偏何姍姍其來遲！」（主上は李夫人を思慕してやまなかつたところ，方士の齊人少翁が李夫人の靈魂を招くことができると言った。彼は夜、燈燭をつらね、帷帳をめぐらし、主上を別の帳におらせ、酒と肉をならべて、遙かに美女の、李夫人さながらの貌を、またそれが幄の中に坐すさま歩むさまを望見させた。しかしまた近づいて視ることができず、主上はいよいよ恋しさ悲しさもごもつり、そのため詩をつくった。言う。是

なるや、非や。立ってこれを望むに、あやにくも何ぞ珊々としてそれ来たることの遅き。）（小竹武夫訳）

少翁が二つのとばりを設ける。その内の一つは李夫人の霊を呼び出すため、もう一つは武帝を居らせるためである。武帝が近づくことができないのはそれが条件だからである。また燈燭を置き酒や肉をならべたという。

ところで、少翁が霊を呼び出すことについては司馬遷の『史記』（卷十二，孝武本紀第十二）にも似たような内容がある。ただし、それは李夫人ではなく、李夫人より早く亡くなった王夫人についての記述である。次に引用しておく⁽³⁾。

其明年，齊人少翁以鬼神方見上。上有所幸王夫人，夫人卒，少翁以方術蓋夜致王夫人及竈鬼之貌云。天子自帷中望見焉。於是乃拜少翁爲文成將軍，賞賜甚多，以客禮禮之。（その翌年，齊人の少翁が、鬼神の方術に通じているということで、上に拜謁した。上には寵愛していた王夫人があったが、死んだ。少翁は、方術で一夜中、王夫人及び竈の神の姿をあらわしてみせましようといった。天子は帷の中からそれを望見した。そこで、少翁を文成將軍に任じ、はなはだ多くの恩賞を賜い、賓客の礼をもって礼遇した。）

ここでは、少翁が武帝のために、とばりを張り、王夫人の姿および竈の神を見せるようにしたことがわかった。明らかに、班固が『史記』における王夫人の内容を李夫人の方にすりかえたのである。この変動によって必ずしも史実ではないが、武帝が李夫人への思いをいっそう強調されることになった。これはすなわち李夫人を返魂香に結びつける第一歩とも言えよう。

時代が下り、東晋（317～420）の干寶は『搜神記』巻二にも『漢書』と似たような記述が

見える。ただし簡単な記述にとどまり、酒や肉の話が見られない。

十六国の前秦（334～394）になると、王嘉がさらにその話を敷衍し、具体化した。彼は『拾遺記』巻五に次のように記している⁽⁴⁾。

帝息於延涼室，臥夢李夫人授帝薜蘿之香。帝驚起，而香氣猶著衣枕，歷月不歇。帝彌思求，終不復見，涕泣流席，遂改延涼室爲遺芳夢室。初，帝深嬖李夫人，死後常思夢之，或欲見夫人。帝猶憔悴，嬪御不寧。詔李少君，與之語曰，朕思李夫人，其可得見乎。少君曰，可遙見，不可同於帷幄。暗海有潛英之石，其色青，輕如毛羽。寒盛則石溫，暑盛則石冷。刻之爲人像，神悟不異真人。使此石像往，則夫人至矣。此石人能傳譯人言語，有聲無氣，故知神異也。帝曰，此石像可得否。少君曰，願得樓船百艘，巨力千人，能浮水登木者，皆使明於道術，賚不死之藥。乃至暗海，經十年而還。昔之去人，或昇雲不歸，或托形假死，獲返者四五人。得此石，卽命工人依先圖刻作夫人形。刻成，置於輕紗幕里，宛若生時。帝大悅，問少君曰，可得近乎。少君曰，譬如中宵忽夢，而晝可得近觀乎。此石毒，宜遠望，不可逼也。勿輕萬乘之尊，惑此精魅之物。帝乃從其諫。見夫人畢，少君乃使春此石人爲丸，服之，不復思夢。乃築靈夢臺，歲時祀之。（武帝が延涼室で休み、夢の中で李夫人が薜蘿香をくれた。武帝が驚いて目が覚めたが、香りがまだ服や枕に残っており、数ヶ月が経っても消えない。武帝がますます李夫人に会いたくなかったが、結局実現できず、涙が濡まで湿った。ついに「延涼室」を「遺芳夢室」に変えた。始めに武帝は李夫人を深く愛したので、夫人が亡くなった後も、時々夫人の夢を見たので、もう一度夫人の顔を見たい。そのため、武帝は日に日に瘦せた。周りの妃たちも落ち着かない。武帝が李少君を招き、「朕

が夫人の顔を見たいのだが、できるだろうか」と尋ねた。李少君が「遠くから見ることはできるが、同じ部屋の中はできません。暗海に「潜英石」があり、その色が青く、羽毛よりも軽いのでございます。盛暑のときには石が涼しく、真冬には石が温かいのです。この石で人の像を彫刻すると、本物のようでございます。その石像を行かせると、夫人が来られます。この石像が人間の言葉を伝えることができ、声はあるが、息はございません。故に神秘的でございます」と答えた。帝が「この石像が得られるだろうか」と。少君が「楼船が百隻、力持ちの人が千人が必要でございます。水泳や木登りができる人は、皆道術を身につけさせて、不老不死の薬をもらいます」と。そこで、李少君が大船団を率い、暗海に行った。十年後、少君が戻ってきた。昔一緒に行った人たちは、雲に昇って帰らない人もいるし、死ぬふりをして帰らない人もいる。とにかく帰ってきた人は四、五人しかいなかった。武帝はこの石を得て、さっそく職人に李夫人の像を彫らせた。完成した後、その像を軽紗の幕の中に置いたが、宛も生きているようだ。武帝は大喜びし、「近づいて見ていいですか」と聞いた。少君は「これは夜中に突然見た夢と同じく、昼に近付いて見ることができません。この石は毒があり、遠くから見た方がよろしゅうございます。近づいてはいけません。陛下は一国の君主の立場にいますので、この化け物に魅せられてはなりません」と答えた。すると武帝は少君の意見に従った。李夫人の姿を見た後、少君はその石の像を粉につぶして丸薬を作った。武帝がその丸薬を飲むと、二度と李夫人の夢を見なくなった。そこで、靈夢台を作らせて、毎年李夫人を祀ることにした。）

ここでは少翁が李少君に変わっている。李少君は前掲の少翁と同じく方士である。『史記』（巻十二、孝武本紀第十二）によると、李少君が武帝の厚い信頼を得ていたが、後に病死した。数年後、少翁がはじめて武帝に謁見し、そして武帝の信頼を得たのであるという。『拾遺記』によると、李少君が暗海の「潜英石」を十年がかり手にいれ、李夫人の像を彫刻させた。完成した後、その像を蚊帳の中に入れた。あたかも生きて見える。武帝が大喜びをしていた。武帝が近づいて見たかったが、李少君は石に毒があるので、近付かないでほしいと諫めた。そこで武帝がそれを諦めたという。これは明らかに史料を参考しながら虚構したものである。この「潜英石」はどんなものなのかはよくわからないが、とにかくこの「潜英石」の登場によってさらに方士の亡霊再現の方術を具体化した。それは後の「返魂香」へのつながりとしてさらに一步を進んだのである。

ちなみに、南朝の宋武帝（420～422年在位）と亡くなった妃殷淑儀に会うために、巫がとばりを設けて合わせた。しかしやはり近付くことができない。『南史』巻一一に次のように記している⁽⁵⁾。

有少頃，果於帷中見形如平生。帝欲與之言，默然不對。將執手，奄然便歇，帝尤哽恨，於是擬李夫人賦（とばり）以寄意焉。（しばらくすると、果たして帷の中に見えた姿は生きていた時と同じようである。帝は彼女と話したいが、黙っていて返事がなかった。その手を取りたいが、忽然として消えた。帝が更に咽びながら怨んだ。そこで『李夫人』に擬して賦をつくり意を寄せた。）

と、漢武帝が李夫人の姿を見るのと極めて似通っている。二つの記述は一つの共通点がある。すなわちどれもとばりを設けて中の妃の姿を見るということである。ただし、宋武帝

の場合は殷妃に近づく試みをしたが、それに失敗した。

亡霊を呼び出す術について、澤田瑞穂氏は『中国の呪法』に多くの事例を取り上げて詳細に「返魂・撰魂」のことを紹介している。さらに宋の儲泳撰『祛疑法』を引用し「移景法」を紹介したうえで、「まさに幻燈式で、少翁の招魂見形はまさしく移景法の元祖だったのではないかと、少翁の降霊術の方法を指摘した⁽⁶⁾。

二、返魂香の様々な伝説

返魂香は李夫人と直接の関係がないが、どれも漢武帝との接点がある。返魂香についてはもっとも古い記述は漢の東方朔（前154～93）の作とされる『海内十洲記』に見える⁽⁷⁾。

聚窟洲在西海中，申未之地。[中略]洲上有大山，形似人鳥之象，因名之爲神鳥山。山多大樹，與楓木相類，而花葉香聞數百里，名爲反魂樹。扣其樹，亦能自作聲。聲如羣牛吼，聞之者，皆心震神駭。伐其木根心，於玉釜中煮，取汁，更微火煎，如黑錫狀，令可丸之。名曰驚精香，或名之爲震靈丸，或名之爲反生香，或名之爲震檀香，或名之爲人鳥精，或名之爲卻死香。一種六名，斯靈物也。香氣聞數百里，死者在地，聞香氣乃卻活，不復亡也。以香熏死人，更加神驗。（聚窟洲は西海にあり，申未の地にある。[略]洲に大山があり，形は人鳥に似通っている。故に神鳥山という。山に大木が多く，楓の類と似ている。その木の花や葉っぱは香があり，數百里以外にも嗅ぐことができる。その名は反魂樹という。その木の幹を叩くと，音がする。その音が牛の群れが吠えているようで，聞いた者が皆怖くて心が震える。その木の根っこを伐採し，玉の釜の中で煮込み，その汁をさらに弱火で煮込むと，黒砂糖の飴状になる。それを

丸めて丸薬のような形にし、名付けて驚精香という。あるいは震靈丸、あるいは反生香、あるいは震檀香、あるいは人鳥精、あるいは却死香という。一つのものに六つの名前があるのは靈物からである。香が数百里以外にもわかり、死者がそれを嗅ぐと生き返ることができ、二度と死なない。その香の煙をもって死者を覆わせると、なおかつ効果がある）

この記述によると、西海に聚窟洲という島がある。聚窟洲に「返魂木」と呼ばれる大木があり、その木に咲かれた花の香が数百里まで伝わる。その木の根っこを伐採し煮込んだ汁から黒飴状の香が作られる。その香の名前は六種類があり、驚精香、震靈丸、反生香、震檀香、人鳥精、却死香という。死者にその香の香りを嗅がせると生き返らせることができる。その香の煙が死者を覆うと、より効果的であるという。

東方朔が漢武帝の臣下である。司馬遷の『史記』滑稽列伝によると、彼が郎という官職に任命され、常に武帝のそばに仕えた。武帝が時々彼に食事や金銭を賜った。『海内十洲記』には返魂香という言葉がなかったものの、反生香と同義語として考えてよからう。同じく『海内十洲記』に死者を生き返らせる事例を取り上げている⁽⁸⁾。

征和三年、武帝幸安定。西胡月支國王遣使獻香四兩，大如雀卵，黑如桑椹。帝以香非中國所有，以付外庫。（中略）到後元元年，長安城內病者數百，亡者太半。帝試取月支神香燒之於城內，其死未三月者，皆活。芳氣經三月不歇，於是信知其神物也。乃更秘錄餘香，後一旦又失之，檢函，封印如故，無復香也。帝愈懊恨，恨不禮待於使者。（征和三年〔前九〇〕，武帝が安定というところに巡視した際、西胡の月支国の王が使者を派遣し、香を四兩献上した。その香は雀

の卵の大きさで、野生の苺のような黒色である。武帝はその香が中国のものでないため、外庫〔外国の貢物を保管する倉庫〕に入れるよう命じた。（中略）後元元年〔前八八〕に長安城内に疫病が流行り、数百人の患者が大半亡くなった。武帝が試しに月支香を城内で焚くと、亡くなって三ヶ月経たない者が皆生き返った。その香りは三ヶ月経っても消えなかった。そのため、武帝はその香が神秘的なものだと信じた。さっそくひそかに残りの香をほいこんだが、後に紛失した。包装に押された印鑑の痕はそのまま開封されていないが、中の香がすでになくなっている。武帝は悔しくて、その使者を手厚くもてなしをしなかったことを後悔した。）

この香は征和3年（前90）に武帝が安定（今日甘肅省涇川）に巡幸した際、西域の月支国から献上されたので、「月支香」という。大きさは雀の卵のようで、色は野生のイチゴのような黒色である。しかし月支香の外観が醜かったから、それとも量が四兩（今日ならば約400グラムだが、漢代の重量は不詳）で少なかったからか、どうも武帝は気に入らなかつたようで、中国のものではないという理由で外庫にしまってしまった。晋の張華撰『博物志』卷二によると、一説は漢の制度では一斤以下のものは受け取らないという。とにかく月支国の使者が武帝の気持ちがあつたようで、「靈香が少ないが、それは生き返らせる奇跡の薬です。疫病の死者が生き返らせることができます。その香りを嗅いだ者は皆生き返るでしょう。その香りは特別でなかなか消えることができません」と説明した。しかしそれにしても武帝が不機嫌のようであつた。そこで使者が姿をくらました。2年後の後元元年（前88）、すなわち武帝が亡くなる前の年に、長安城内に疫病が流行り、そ

の病気に罹った数百人の大半が亡くなった。武帝が試しにその香を使ってみると、死後3ヶ月以内の者が皆生き返った。月支香の香は城内に漂い、3ヶ月経っても消えなかったという。今度武帝が月支香の薬効を信じるようになり、急いで使者を探させたが、もうどこにもいなかった。武帝はひそかに残りの香をしまいこんだが、それもしばらく時間が経つと不思議なことに消えてしまったという。

東方朔が話したような返魂香は存在したかどうかはわからないが、その後も返魂香の伝説が続いた。明の謝肇淪(1567～1624)が『五雜俎』巻十・物部二に次のような記述がある⁽⁹⁾。

永樂初、天妃宮有鸛卵、爲寺僧所烹、將熟矣、老僧見其哀鳴、命取還之、數時雛出、僧驚異、探其巢、得香木尺許、五采如錦、持以供佛。後有倭奴見、以五百金買之、問何物、曰、此仙香也、焚之死人可生、卽返魂香也。(永樂年間[一四〇三～一四二四]の初め頃、天妃宮にコウノトリの卵がある。寺の僧侶がその卵をゆでて食べようとした。もうすぐできあがる時になって、老僧が鳥の鳴き声が聞こえて、卵を巢に返すよう命じた。数時間後、意外にも小鳥が孵化した。僧侶がよくその巢を調べてみると、中から一尺程の香が見つかった。その香木の色が鮮やかで錦のようである。すると僧侶たちがその香木を仏像前に供養することにした。その後、倭人がそれを見かけ、五百金で買い取った。僧侶が「それは何ですか」と尋ねると、倭人は「それは仙香です。焚いたら死者が生き返ります。すなわち返魂香です」と答えた。)

この記述によると、茹でた卵がまた孵化したという。実に不思議な話で、人間だけではなく動物を生き返らせることもできる。さらに日本人が五百金の高価でそれを買取ったのも真実のように聞こえる。さらに時代が下

がって清の袁枚(1716～1797)の『子不語』巻一九に次のような記述がある⁽¹⁰⁾。

余家婢女招姐之祖母周氏。年七十餘。奉佛甚虔。一夕寢矣。見室中有老嫗立焉。初見甚短。目之漸長。手紙片堆其几上。衣藍布裙。色甚鮮。周私憶同一藍色。何彼獨鮮。問。阿婆藍布從何處染。不答。周怒。罵曰。我問不答。豈是鬼乎。嫗曰。是也。曰。既是鬼。來捉我乎。曰。是也。周愈怒。罵曰。我偏不受捉。手批其頰。不覺魂出已到門外。而老嫗不見矣。周行黃沙中。足不履地。四面無人。望見屋舍。皆白粉垣。甚宏敞。遂入焉。案有香一枝。五色。如秤桿長。上面一火星紅。下面彩絨披覆層疊。如世間嬰孩所戴劉海塔狀。有老嫗拜香下。貌甚慈。問周。何來。曰。迷路到此。曰。思歸乎。曰。欲歸不得。曰。嗅香即歸矣。周嗅之。覺異香貫腦。一驚而蘇。家中僵臥已三日矣。或曰。此即聚窟山之返魂香也。(わが家の婢女、招姐の祖母は周姓で年は七十余り、仏教を信奉すること甚だ敬虔である。ある夜、彼女が臥していると、ふと、部屋の中に一人の老嫗がつつ立っているのに気づいた。初め小柄に見えたが、次第に大きくなった。彼女はちり紙を几の上に載せた。衣服は藍色で布の裙をはいている。色が頗る鮮やかである。周女は、心のうちでひそかにこれまでに見た同じ藍色について思い返してみた——どうして彼女のだけがかくも鮮やかなのだろうか。そこで周女は問うた。「お婆さん、この藍布はどこで染めなされたか」が、応えがない。周女は怒って罵った。「わしが問うているのに答えない。そなた、鬼でもあるまいに」「いや、鬼じゃ」「鬼だとな」と周女がわめく。「ならばわしを捉えにきたのか?」「そうじゃ」周女はますます怒って罵る。「わしゃあ、捉えられたりはせんぞ!」言うなり相手の頬を平手で張った。とたんに周女

の魂は体から飛び出したことに彼女自身は気が付かなかった。いつの間にか門外にいて、老嫗は消えていた。周女は黄沙茫茫たる中を行くのだが、足は地を踏まず、周りじゅうに人影はない。彼方に屋舎が見える。周りはみな白壁の垣に囲まれ、中は豁然として広闊である。ともあれ、入ってみることにした。中には案があって、その上に一枝の香が立っている。香は五色に彩られ、長さは秤の棒ほどもあり、頂には赤々と火が灯っている。その下は彩色の絨毯が幾重にも重なって世間でよく見かける嬰兒の頭上の劉海式の髪形のようなだ。老嫗が一人、香下にぬかずいている。それが周女を見て頗る慈愛に満ちた表情で問うた。「どうしてここに来られたのか」「路に迷ってここに着きました」「帰りたいはないか」「帰りたいとも、帰れませぬ」そこで老嫗が言った。「香を嗅げ。さすれば帰れるぞ」周女は香を嗅いだ。異香が脳中を貫くのを覚えた。はっとしたら周女は蘇っていた。家の中で、三日間硬直したまま臥していたのだった。ある人が、「あなたが嗅いだのは、聚窟山の返魂香だ」と言った。——手代木公助訳

袁枚は身近な人である周氏が意識不明の三日間のことを事実として記したうえで、さらにある人の口で返魂香の薬効だと付け加え、人を信じ込ませようとした。ここでは強調されたのはやはり返魂香の薬効である。

ところで、武帝が香をもって疫病の流行りを止めようとする記述がほかにもある。ただし必ずしも返魂香や月支香ではなかった。たとえば、兜末香はその一つである。明の洪思集、胡文煥校正の『香譜』巻上・香之品に『本草拾遺』などを引いて次のように記している⁽¹¹⁾。

本草拾遺曰。燒去惡氣除病疫。漢武帝故事曰。西王母降上燒是香。兜渠國所獻。如大

豆。塗宮門香聞百里。關中大疫。死者相枕。燒此香疫則止。內傳云死者皆起。此則靈香。非中國所致。〔本草拾遺〕に曰く。惡気を燒き疫病を除ける。『漢武帝故事』に曰く。西王母が降りた際、武帝がこの香を焚いた。兜渠国が献上したもので、大豆のようである。宮殿の大門に塗ると、その香りが百里以外まで伝わる。關中に疫病が流行っていた際、死者が積み重なった状態となった。この香を焚くと、疫病がすぐ止められた。〔漢武帝〕内傳にいう死者が皆生き返られた。この香は靈香であり、中国のものではない。

兜末香は兜渠国が献上したもので、名づけて「兜末香」と言われたのであろう。この香が月支香と比べ、少し小さい。月支香は雀の卵のような大きさで、兜末香は大豆のような大きさである。今回は疫病が流行りの範囲は長安を含めた關中地域であるが、城内では死者が積み重なった状態で、死人の臭いももしかしたら宮内まで蔓延していたかもしれない。武帝が兜末香を宮門に塗りつけて、せめて死人の臭いを消そうとしたと想像される。返魂香や月支香のような人を生き返らせる記述はないが、疫病を止めたのは月支香と同じ薬効であった。

三、返魂香と李夫人

それでは、返魂香与李夫人がいつ、どのように結びつけられたであろうか。それは白樂天の樂府詩『李夫人』（『白氏長慶集』巻四・諷諭四）によるものである⁽¹²⁾。

漢武帝初喪李夫人。夫人病時不肯別。死後留得生前恩。君恩不盡念未已。甘泉殿裏令寫眞。丹青寫出竟何益。不言不笑愁殺人。又令方士合靈藥。玉釜煎鍊金爐焚。九華帳深夜悄悄。反魂香降夫人魂。夫人之魂在何許。香煙引到焚香處。既來何苦不須臾。縹

縵悠揚還滅去。去何速兮來何遲。是耶非耶
 兩不知。翠蛾髻髻平生貌。不似昭陽寢疾
 時。魂之不來君心苦。魂之來兮君亦悲。背
 燈隔帳不得語。安用暫來還見違。(漢の武
 帝、初めて李夫人を喪へり。夫人病む時肯
 て別れず、死後留め得たり生前の恩。君恩
 盡きず念ひて未だ已まず、甘泉殿裏眞を寫
 さしむ。丹青寫し出すも竟に何の益あら
 ん、言はず笑はず人を愁殺す。又方士をし
 て靈薬を合せしめ、玉釜に煎鍊し金爐に焚
 く。九華帳深うして夜悄悄、返魂香は降
 す夫人の魂。夫人の魂何の許にか在る、
 香煙引き到る焚香の處。既に來る何を苦み
 て須臾ならざる、縵悠揚として還た滅去
 す。去ること何ぞ速かに來ること何ぞ遅き、
 是邪非邪兩つながら知らず。翠蛾髻髻たり
 平生の貌、昭陽に疾に寢ねし時に似ず、魂
 の來らざるとき君の心苦み、魂の來ると
 き君亦悲む。燈に背き帳を隔てて語るこ
 とを得ず、安んぞ暫く來つて還違らるるを用
 ひん。) (佐久節記)

ここまで来て、返魂香はついに李夫人と結
 び付けられたのである。前掲したように、も
 ともと方術によって帷の中に亡霊の姿が見え
 る話は、『史記』における王夫人についての
 記述があったが、『漢書』では李夫人の話に
 すり替えられた。また、返魂香と漢武帝と関
 係する種々の伝説に加え、返魂香が潜英石の
 代わりに亡霊を再現する手段となる。詩中の
 「九華帳深うして夜悄悄、返魂香は降す夫人
 の魂」は、まさにその形成した痕跡を示して
 いる。ただし、それはあくまで比喩的な表現
 であるにすぎない。時代が下り、元の鍾繼梁
 の『録鬼簿』には元の雜劇に李文蔚の作『漢
 武帝哭李夫人』があると記している。しかし
 残念ながら、この作品が散逸してしまい、返
 魂香がどのように李夫人と結び付けて表現さ
 れたかは知る由もない。しかしながら、白樂

天の詩が李夫人を返魂香と結び付けたものの、
 中国では「返魂香」が画題までには至らな
 かった。具体的に言うと、香の煙の中から李
 夫人が立ち昇った図像が形成されなかった。図
 像まで成立されたのは日本の絵画によってで
 ある。

四、日本における「返魂香」構図の形成

日本における「返魂香」の受容は、やはり
 白樂天の詩作「李夫人」であると思われる。
 『白氏文集』は彼が存命中にすでに日本に伝
 えられた。平安時代の中期貴族や知識人は白
 樂天に夢中になり、大江朝綱や高階積善は白
 樂天の夢を見たという逸話が伝えられている。
 その流れの中で平安時代後期の藤原成範
 (長承3年～文治3年 [1134～1187]) の作
 とされる『唐物語』は「李夫人」受容の初期
 の例とされる。小林保治氏の『唐物語』解題
 によると、『唐物語』の成立年代が永万元年
 (1165) 7月以後、安元2年 (1176) とする
 のは妥当であろうという。『唐物語』が全部
 で27話の物語があるが、その第15話が李夫人
 の物語である。内容はそれほど長くないが、
 約三分の一の内容が返魂香の話である。次に
 見てみよう⁽¹³⁾。

またなき人のたましみをかへす香をたき
 て、夜もすがらませた給ふに、ここのへの
 にしきの帳のうちかすかにてよのともし火
 のかげほのかなる、やうやくさよふけゆく
 ほど、あらしすさまじくよしづかなるに、
 返魂香のしるしあるにやとおぼえ給ひけれ
 ど、李夫人のかたちあるにもあらず、なき
 にもあらず、ゆめまほろしのごとくまがひ
 て、つかのまにきえうせぬ。まつことひさ
 しけれど、かへる事はうばたまのかすみす
 ぢきるほどばかり也。ともし火をそむけて
 帳をへだてて、物いひこたふることなけれ
 ば、なかなか御心をくたくつまとぞなりに

ける。
とあり、基本的には白楽天の「李夫人」に沿った内容であったが、比喩というより物語の内容の一部として組み入れられ、「返魂香」のウエイトが大きくなった。この変更は成範の趣向が窺われる。フランソワ・ラシヨール氏は「返魂香と李夫人の幻影」に次のように変更の原因を分析している⁽¹⁴⁾。

この非常にイメージを喚起する詩から、成範は返魂香の話を取り出した。彼の白居易の詩の読み方というのは、詩人の教訓的な調子については“低音で”（sotto voce）で残す程度にとどめるという方針であった。実際、この詩の結論は、人々がなりふり構わず恋情に身を任せることを思いとどませようとしているように見える。しかし、日本の男女の読者の心をとらえるような要素がすべてここに集まっている。

と述べ、この日本化の第一歩が李夫人から返魂香に重点を移したということである。なぜならば、日本人の読者の心をとらえるすべての要素がその返魂香に集まっているからだという。この分析的な中していると思われる。実際、返魂香が日本人の生活に浸透している状況を見れば、その関心度がいかに高かったのかがわかる。ここでは返魂香にまつわる伝説やそれと関連する謡曲を見てみよう。『尾張名所図会』巻七によると、阿波手の森に返魂香塚がある。その伝説について、以下の二つある⁽¹⁵⁾。

①光仁天皇の天応元年（781）、河内権守きの紀これひろ是広の子光麿が七歳で父を尋ね、阿波手の森まで来て、病気を患い亡くなった。その時は広もちょうど出羽から来た。我が子の死を聞き、智光上人を頼んで返魂香を焚き、一瞬の再会を果たした。その後は塚となり今も残っている。

②光仁天皇の宝亀11年（780）、奥州しのぶ信夫の

里から若い夫婦（夫を恩雄^{やすたか}、妻を藤姫^{ふじひめ}という）上京する道中、阿波手の森まで来た。藤姫が病にかかって、遂に亡くなった。夫の恩雄がこれを見て、悲しみのあまりにそこの法正寺で出家して、藤姫の塚の辺りに庵を結び住むことにした。その後、天応元年、橋本中将がそこを通り、粟手の森の古跡を遊覧した際、恩雄法師から藤姫のことを聞き、はじめて藤姫が自分の娘とわかった。そこで中将が恩雄の師である東岩和尚に頼み、返魂香を焚いた。煙の中に、若い女性が忽然と現れた。中将が近づいて声をかけようとしたが、女性が煙と共に消えた。というわけで、この塚は返魂塚と呼ばれるようになった。

同じ『図会』よると、この二説が七ツ寺の縁起とは大きな異同があるという。その記述が『尾張名所図会』巻一にある⁽¹⁶⁾。

③光仁天皇の天応元年（781）、河内権守紀是広は秋田城介になり、任地に赴いたが、息子の光麿は七歳で父親を慕いひとり旅立ったが、尾張国の萱津で病死した。ちょうどその時は広も任を終えて里帰りの途中、萱津に泊まった。そこで息子の悲報を知り正覚院の智光和尚に息子の復活を頼んだ。智光が寺の東の林の中に祭壇で返魂香を焚き、父子の再会をかなえた。後には広は息子を正覚院に埋葬し、七歳の息子の追福のために七つの仏閣を建てた。故に七ツ寺という。

この伝説に触発されたのかもしれないが、謡曲「不逢森」^{あわでのもり}（番外曲「返魂香」）が金春禅竹によって創作されたとされる。この作品の内容が前掲の伝説と全く異なる。あらずじは次の通りである⁽¹⁷⁾。

④鎌倉の商人が前年の春都へ上り、秋に戻る予定であるが、戻らなかつた。娘が心配で父親を探しの旅に出たが、尾張国の宿で病死した。宿の主が亡骸をあわでの森の僧に渡した。ちょうどその時娘の父親が宿の隣に泊り

にきた。宿の主からその話を聞き、我が娘とわかった。慌てて森に行ったが、すでに僧に荼毘され埋葬された。その僧は昔中国から持ち帰った返魂香があるので、さっそく香を焚き、煙の中から娘の姿が現れ、父親との対面が実現した。

謡曲「返魂香」の素材については、井上愛氏の「番外曲〈返魂香〉試論」に詳細な考証がある。それによると、禅竹が多く文学作品や史料を参考しながら創作したという⁽¹⁸⁾。前掲の伝説との間に影響関係はみとめられない。しかし四つのストーリーの間にいくつかの点と線がつながっていると思われる。

(1) 場所が同じである。①の「阿波手の森」、②の「栗手の森」、④の「不逢森」はみな音が「あわでのもり」で、その場所は③の尾張

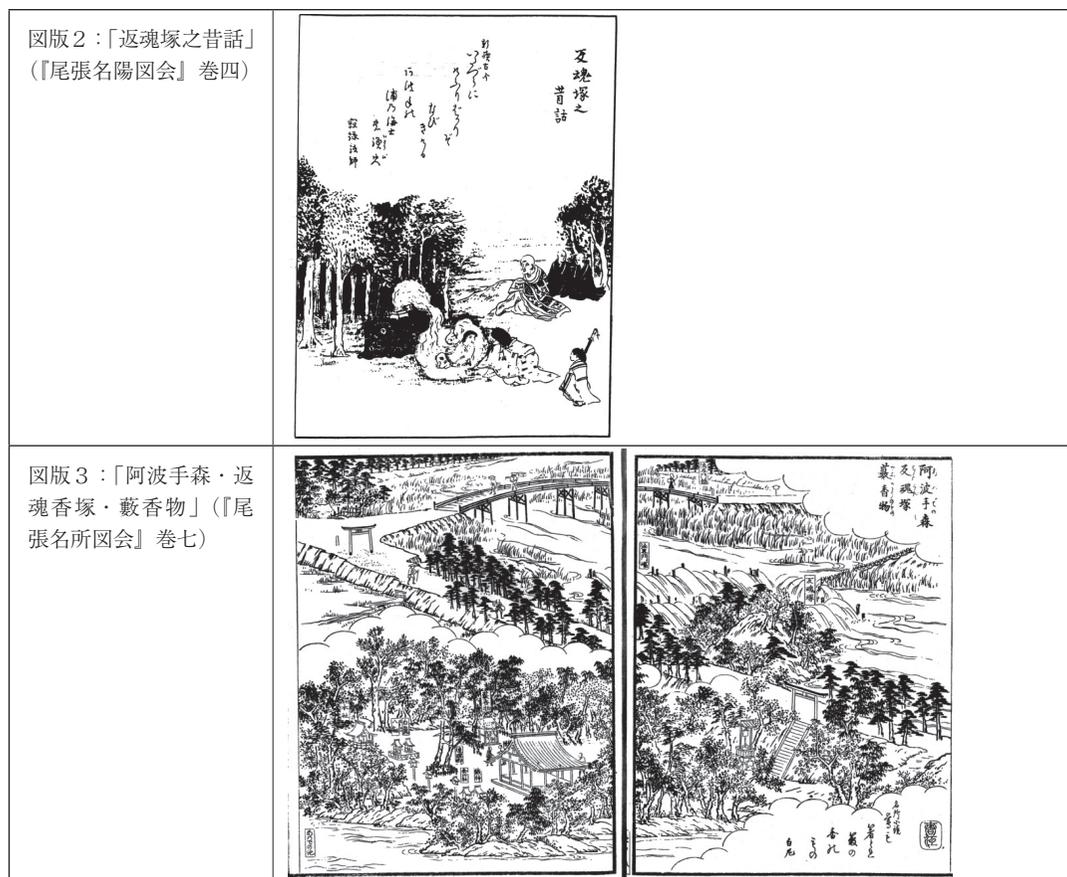
国の萱津にあるとされる。

(2) 返魂香が降霊術の道具として亡くなった人の生前の姿を再現する。

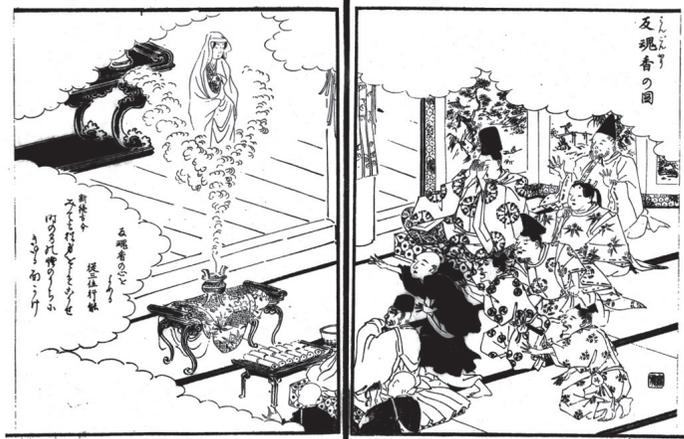
(3) 死者と生者との対面は夫婦ではなく、親子関係である。

(4) 死者がその神社や寺に埋葬される。従って「返魂香塚」が存在することとなる。

この四つの日本版の「返魂香」はいずれも返魂香によって生者と死者の対面を実現させることにこだわる。日本人がいか「返魂香」への関心が高いかがよくわかる。そして絵画の視点から見れば、その対面の一瞬によって人間の感情がクライマックスに達し、一つの画面に固定させ、可視化することが可能になる。それは「返魂香」という画題に形成されていく過程において欠かせない条件である。



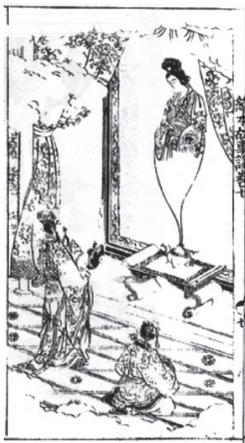
図版4：「返魂香の図」
（『尾張名所図会』巻七）



言うまでもなく、画題「返魂香」の形成過程において数多くのヴァリエーションの作品の存在が絵師たちに影響を与える。彼らが絵

を構想する際、いつも煙の中から立ち昇る霊を画面の中心に置き、あるいは煙の中の人物を大きく描く。次の作例を見てみよう。

図版5：「李夫人」（橘有税『繪本故事談』巻七，正徳4年[1714]刊本，東北大学狩野文庫所蔵）



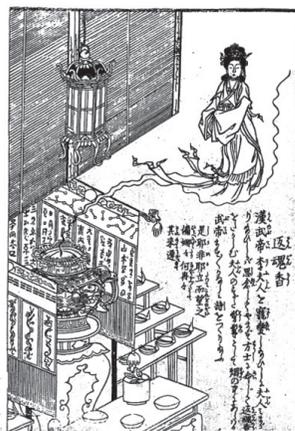
図版6：李夫人〔返魂香〕（馬場信意『分類畫本良材』巻四，正徳5年[1715]刊本，大英図書館所蔵）



図版7：「李夫人」[返魂香]（文鳳駿聲『文鳳漢畫』，享和3年[1803]刊本，イギリス・V&A美術館所蔵）



図版8：「返魂香」（鳥山石燕『図画百鬼夜行』，国書刊行会1992年）



図版9：無題 [返魂香]（無款，二枚続き多色摺り，『浮世絵聚花』シカゴ美術館 I）



肉筆絵の「返魂香」について、フランソワ・ラショー氏は前掲の論文に丸山応挙（1733～1795）の作品が最も有名としている。その作品のバージョンが三つある。一つ目は東

京都台東区谷中の全生庵に所蔵されているものである。二つ目は青森県弘前市の久度寺に所蔵されている「反魂香図」と題するものである。三つ目はアメリカのバークレイ大学に

所蔵されているものである。そして同じテーマを扱った最後の絵が歌川豊春（1735～1814）の作がプラハ国立美術館に所蔵されていることを紹介された。これらの絵は未見だが、全生庵の「返魂香」について、フランソワ・ラショー氏の紹介によると、青磁の器、白い煙、白装束といった絵本に見られない色が「美人画のような印象を持つ」という⁽¹⁹⁾。

六、おわりに

以上、「返魂香」と「李夫人」との関係について考察してみたが、以下のことを指摘することができる。

(1) 中国ではもともと「李夫人」は「返魂香」と無関係である。「李夫人」を「返魂香」と結びつけるのは長いプロセスがある。まず班固の『漢書』において、『史記』における武帝の王夫人の霊を呼び出す「招魂術」の描写を李夫人にすりかえたのがその第一歩である。次に王嘉の『拾遺記』において、「潜英石」の話によってさらに敷衍したのである。

(2) 中国では「李夫人」が「返魂香」と結び付けられたものの、画題には至らなかった。それを実現させたのは江戸時代の絵師たちである。それは白楽天の影響かもしれないが、そもそも彼らの趣向は「李夫人」に対するより、「返魂香」に対するものであったからである。江戸時代以前の『唐物語』から「反魂香」が熟知されていることがよくわかる。また謡曲の作品などから、「返魂香」が如何に日本化され、日本社会の生活に如何に信仰として深く浸透しているかがよくわかる。そのような信仰の中で、江戸の絵師たちが「李夫人」という画題を表現する際、香の煙から立ち昇る李夫人というパターンを描くその流れの延長線であると思われる。

(3) 日本において、早い時期から「返魂香」が民間の信仰となり、それは必ずしも後の

「李夫人」という画題とは関係がないが、「李夫人」を「返魂香」の構図にする受容・変容の社会的、精神的な背景として見逃すことができない。

(4) さらにその後、香ではなく紙を焚いた煙の中にあられることなどが後の歌舞伎などに系脈を引いているように思われるので、その方面の必要であろう。

【注釈】

- (1) 漢・司馬遷『史記』卷四十九、外戚世家第十九（中華書局、1959年1980～1981頁）、小川環樹・今鷹眞・福島吉彦訳『史記世家』下（岩波文庫、1991年8月38～39頁）
- (2) 漢・班固『漢書』卷九十七上、外戚伝第六十七上（中華書局、1962年3952頁）小竹武夫訳『漢書』第八卷（ちくま学芸文庫、1998年、149頁）
- (3) 漢・司馬遷『史記』卷十二、孝武本紀第十二（中華書局、1962年458頁、野口定男等訳『史記』上（中国古典文学大系、平凡社、昭和43年、167頁）
- (4) 前秦・王嘉『拾遺記』卷五（漢魏六朝筆記小説大観、上海古籍出版社、1999年、524～525頁）
- (5) 唐・李延壽『南史』卷一一・列伝第一后妃上（中華書局、1975年、324頁）
- (6) 澤田瑞穂『中国の呪法』（平河出版社、1984年155頁）
- (7) 漢・東方朔『海内十洲記』不分卷（漢魏六朝筆記小説大観、上海古籍出版社、1999年67頁）
なお、一つの香で六つの名称について、明の楊爾曾は『海内奇観』卷十（中国古代版画叢刊二編第八輯、上海古籍出版社影印本、1994年676頁）に次のような異なる記述がある。

返魂香樹大如桐栢，花開數百里，煉液爲香。一日驚魂香，二日處靈香，三日返生香，四日旃檀香，五日精鳳香，六日卻死香。此六香實神仙異物，人死聞氣即活。（返魂香樹は大きくて桐や栢のようである。花の香は數百里まで伝わり，そのエキスを抽出して香を作る。一名は驚魂香，一名は處靈香，一名は返生香，一名は旃檀香，一名は驚鳳香，一名は卻死香という。この六つの名前の香は実に仙人の異

- 物であり、死人がその香りを嗅いだらすぐさま生き返る)
- (8) 漢・東方朔『海内十洲記』(漢魏六朝筆記小説大観, 上海古籍出版社, 1999年, 67～68頁)
- (9) 明・謝肇淛『五雜俎』卷一〇・物部二(上海書店出版社, 2001年, 210頁)
- (10) 清・袁枚『子不語』卷一九(『新齊諧』, 齊魯書社, 2004年, 348頁), 手代木公助訳『子不語』卷一九(平凡社東洋文庫, 2010年, 2月222～224頁)
- (11) 明・洪思集, 胡文煥校正『香譜』卷上・香之品(四庫全書子部・譜録類)
- (12) 唐・白居易『白氏長慶集』卷四・諷諭四(四庫全書集部・別集類, 佐久節訳注『白樂天全詩集』第一卷・卷四, 日本図書センター昭和53年, 351～354頁)
- (13) 小林保治訳注『唐物語』(講談社学術文庫, 2003年, 124頁)
- (14) 『アジア遊学』特集「共生する神・人・仏」(勉誠出版, 2005年, 125頁)
- (15) 『尾張名所図会』卷七(日本名所風俗図会6 東海の巻, 角川書店, 昭和59年, 238頁)
- (16) 『尾張名所図会』卷一(同上, 四2頁)
- (17) 『謡曲三百五十番集』舞曲三十二番(江戸文芸第29巻, 日本名著刊行会, 昭和3年, 640～641頁ご参照)
- (18) 井上愛「番外曲<返魂香>試論」(日本女子大学国語国文学会編『国文目白』第四六号, 平成19年2月51～61頁ご参考)
- (19) 『アジア遊学』特集「共生する神・人・仏」(勉誠出版, 2005年, 125頁)

【図版】

- (1) 清・顔鑑塘撰, 王翹絵『百美新詠』図伝一, 『中国歴代人物像伝』四, 齊魯書社, 2002年3015頁)
- (2) 『尾張名陽図会』卷四(日本名所風俗図会6 東海の巻, 角川書店, 昭和59年549頁)
- (3) 『尾張名所図会』卷七(同上, 235頁)
- (4) 『尾張名所図会』卷七(同上, 237頁)
- (5) 橘有税『絵本故事談』卷七(正徳4年[1714]刊本, イギリス・V&A美術館所蔵)
- (6) 馬場信意『分類画本良材』卷四(正徳5年[1715]刊本, 大英図書館所蔵)
- (7) 文鳳駿聲『文鳳漢画』(享和3年[1803]刊本, イギリス・V&A美術館所蔵)
- (8) 鳥山燕石『今昔百鬼拾遺』(『図画百鬼夜行』国書刊行会, 1992年193頁)
- (9) 『浮世絵聚花』(シカゴ美術館I, 小学館, 1979年)